



■AMED 事業シンポジウム

「大人の発達障害の臨床ことはじめから 15 年」レポート■

7月8日、昭和大学附属烏山病院リハビリテーションセンターで AMED(*1)シンポジウム「成人期発達障害の親なきあとを考える」が開催されました。このうち、加藤進昌（のぶまさ）先生（公益財団法人神経研究所理事長、東京大学・昭和大学名誉教授）の報告「大人の発達障害の臨床ことはじめから 15 年」を紹介します。

加藤先生は、はじめに今年 1 月から TOSCA（トスカ、東京都発達障害支援センター）の成人部門（おとな TOSCA）が小石川東京病院内の公益財団法人神経研究所（文京区大塚）でスタートしたことを紹介。顧問弁護士が法律相談もおこなうそうです。

日本で最初の成人期発達障害専門外来は 2008 年、加藤先生が烏山病院に開設しました。発達障害は ASD が中心であり、学習障害もありますし、数は ADHD が多いのですが支援というには若干 ASD の人たちとは違うかもしれないと加藤先生はいいます。初診時にどれくらいの方が発達障害と診断されるか。烏山病院では 20 歳未満では 70%、50 代以上では 30%です。診断がついた方で一番多いのは 20 代、30 代ですが 50 代以上もいますし、最近では定年退職後の方もいます。小石川東京病院では 2 週間の検査入院を経て発達障害と診断されるのは 4 割台です。

次に加藤先生は、愛着の問題について風景構成法（絵を書いてもらって分析する手法）で具体的事例をあげながら説明しました。

続いて 2021 年の E テレ番組「きょうの健康 身近な発達障害」の録画を上映。出演した加藤先生は番組の中で、ASD の特性の根幹にあるのは他者目線がわからないこととといいます。声のトーンとかまわりの状況とか総合的に判断することができない、だから人間関係が築けないし会話が成立しないということになります。周囲の変化についていけないから、安定したことや決まったことを求め、好きなことに対するこだわりになります。加藤先生によると 15 年間、ASD の人たちはどういう人たちかを考え、本を読んで得たものではなく患者さんの声を聞いて考えた末の結論だといいます。

発達障害専門外来と同時に開設したデイケアについても話されました。当初は加藤先生自身が手探りで五十嵐美紀先生や横井英樹先生に任せてきましたが、やがてこれがピアサポートプログラムに結実してきたといいます。試行錯誤の中で良い結果が出てきた。最初は理由がわかりませんでした。当事者同士の集まりであれば悩みや話題を共有することができるとうわってきたそうです。

最後に2025年に竣工予定の新晴和病院(有料障害者ホームや宿泊型自立訓練室、デイケアを併設)を紹介して報告を終わりました。(M.N)

(*1)令和3-5年度AMED(国立研究開発法人日本医療研究開発機構)事業「ASD当事者と家族が共に学ぶプログラムの開発と包括支援システムの構築」

■あかね会主催の講演会「親亡き後を考えるII」に参加して■

去る6月17日(13:00~16:00)に烏山病院中央棟3階会議室で行われた標記の講演会に参加して感じたことを書いてみました。

講師は烏山・酒入・飯田の3氏で、7年前に障害者の権利擁護支援センターを立ち上げチームで支援活動をされているそうです。参加者は40人ほどでした。

前半は成年後見に係わる支援活動の現場の状況報告のような内容でした。たとえば、法制度の中身が絶えず微妙に変化を続けているために支援現場に戸惑いが起こり、その都度確認しないと支援活動に支障を来すようです。関連してフロア(聴衆)から「成年後見制度は利用し難い。後見人は一生変更出来ないなど」の指摘があり、「制度の見直しも進行しているので、いずれ改善されるでしょう。」と講師が応ずる場面もありました。

ここまでは親族間の争いが多い財産管理の話でした。

後半は「障害者が地域で安心して暮らして行くためにどんな支援が有用か」という話です。家族信託制度にも言及がありました。委託者、受託者、受益者など基本的な説明の後に、「受託者に誰を選びますか?」という唐突な問いかけがありフロアからの反応は芳しくなく、「きょうだいに頼む人が多いようです」と括っていました。親が健在のうちに信頼できる受託者を選んでおくべきは当然のことのように見えますが実際には時機を失することがあり、そのような場合でも救済できた自分達の支援活動の事例を紹介していました。

[事例]当事者Dさん、70歳、統合失調症。同居していた母が認知症になり、老人ホームへ入所。一人になったDさんに対して私たちチームは「Dさんの話を聞く会」を立ち上げ支援することにした。途中いろいろなことがあったが、今ではDさんは庭にバラを植えて「地域のためになることをやりたい」と楽しく暮らしている。

障害者が地域で安心して暮らして行くために、法制度、地域の支援行政、医療等が必要なことは言うまでもなく、実際には当事者それぞれの抱える困難な条件を許容する環境と暮らしの整備を支援する多様な活動が不可欠であることを感じさせる講演会でした。(H.K)

■BOOK REVIEW

「障害をしゃべろう！」

里見喜久夫 上・下巻 青土社 2021年10月刊■

著者（インタビュアー）の里見喜久夫さんは商品デザインの会社の経営をなさっている方。2011年3月の東日本大震災により、人生を変えた人、変えざるを得なかった人がたくさんいた。

里見喜久夫さんもおの1人。気持ちを落ち着かせるために寄付をしたが、それだけでは気持ちが収まらなかったとのこと。

復興の為には、新しい社会をどう創っていったらよいか、その新しい社会の当事者にならないかと思っているときに、たまたま障害者福祉に携わる人に出会い、雑誌の発行を勧められた。

それまでは障害者福祉に関わった経験はなく関心があったわけでもなかったとのこと。

季刊「ことのね」はその意を受けて創刊された、「社会を楽しくする障害者メディア」。

この「障害をしゃべろう！」は季刊「ことのね」の第5号・2013年2月発行から第36号・2020年11月号までに掲載された創刊者・編集長の「ぶっちゃけインタビュー」をまとめたもの。

上・下巻併せて32人のかたがたとのお話が掲載されている。

医師の立場、支援者の立場、障害の当事者としての立場、障害を持って生まれた子を持つ親の立場等、いろいろな部門の方々がそれぞれの専門分野を通してお話をされています。

各専門分野のことを通してお話されていることで、大変ためになるお話がたくさんあります。

季刊「ことのね」の最新号は2023年8月、第47号を発刊。

特集は「走って 転んで ケンカして」

川崎市・山形市の子供の遊びばを中心に上げています。



「ぶっちゃけインタビュー」も43回を迎え、今回は鳥類学者の方とお話をされています。手に取ってお読みになることをお勧め致します。(M-T2)

■「烏山東風の会」今後のスケジュール ■

■家族相談会 10月18日(水) 11月15日(水) 午後1時30分～午後4時

烏山病院 発達障害医療研究所デイルーム

専門家ではありませんが、同じ親の立場として家族会世話人がお話を伺います。

■世話人会 10月28日(土) 午後1時30分～

◇相談会/世話人会の申し込み・お問合せ先

：「烏山東風の会」携帯 080-3009-1200 kochinokai@au.com

：「烏山東風の会」ホームページ：<https://www.kochinokai.com> お問合わせコーナー



■年会費振込のお願い■

この会報誌は「烏山東風の会」に入会している方にお配りしています。10月より下半期になりましたので、下半期の会費をまだお支払いになっておられない方は、半年分3000円を、以下のいずれかの銀行口座にお振り込みいただくようお願い申し上げます。

- ①三菱東京UFJ銀行 永福町支店 (普) 0106550 「烏山東風の会 会計 黒田邦夫」
- ②ゆうちょ銀行 記号・番号：10000-29576521 「烏山東風の会」

なお、ご自身の会費納入実績、そのほか会費にかかわるお問い合わせなどありましたら、以下にご連絡ください。：黒田邦夫 090-4173-7604

ダイケア通信

2023年8月28日、夏の終わりとは思えないほどの暑さが残る中、夏祭りが開催されました。参加者は30~40人ほど、ダイケアを利用する方々はもちろん、スタッフさんも大盛り上がり。ラジカセから迫力ある音量のBGMが響きわたり、会場の熱気と歓声は最高潮に。なかには涼しげな浴衣や甚兵衛を着た方も何人か見受けられました。気合い入っていますねえ~!

最初に行われたのは射的。ボールを的に向けて3回投げて、当たったものを同じ商品(お菓子、レトルト食品など)がもらえます。次は盆踊り。『ビューティフルサンデー』、『ダンシングヒーロー』、そして『炭坑節』。スクリーンに映し出された動画内の踊り人たちの動きと陽気な音楽に、思わず体が揺れました。最後はスイカをみんなで美味しくいただき、拍手に包まれて夏祭りは終わりへ。とても素敵な思い出になりました。それではみなさん、よき秋を迎えましょう! (KK)



射的◎

景品も
たくさん



みんなで
盆踊り

おいしい
スイカを
食べました

